



Breath of Earth —— 大自然の色を再現する

南雲 暁彦 | AKIHIKO NAGUMO

人間の想像をはるかに超えた大自然の姿。
時としてファインダーに収まりきれないほどに壮大で、目を疑うほどに鮮やかだ。
それは「地球の息吹き (Breath of Earth)」、五感に響いた地球の尊さだった。
シャッターを押した瞬間に感じたまま、紙に写し取ってみたいと思う。

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●制作背景

今回、参加するにあたり、フォトグラファーとして参加することの意味から考えてみることにしました。凸版印刷に所属して写真を撮り続け、約20年になります。その間にカメラはどんどん進化して、僕自身もいろいろなものを見ながら進化してきたように思います。

ここ10年は海外に出かけて風景を撮る機会が増えました。大自然の撮影は、釣りをすると似ています。狙ったポイントで釣竿を構えるようにカメラを構え、魚がかかるのを待つように天気や時間を待つ。そしてその瞬間が訪れた一瞬を逃さずにシャッターを切る。食いついた魚を釣りあげるように、虹やオーロラを捉える。そんな心情でいつも撮影に挑んできました。

撮影地で常を感じるのが、自分が「地球人」だという感覚です。世界のどこへ行くのが地球の上であることに変わりはなく、自分の星の上を動いているだけだと思えば思うほど、もっといろいろな所へ出かけて地球という星の姿を見たくくなります。一方で、圧倒的な大自然に向き合うたびに、この小さな自分の存在意義を考え、シャッターを切り続けてきました。

●制作コンセプト

こうして世界各地の大自然と向き合う中で、折に触れて感じてきたものが「地球の鳴動」でした。それは五感すべてに響きわたる音のない音であり、僕には星の息吹

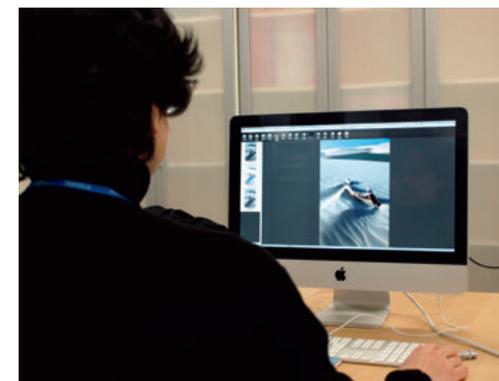


きのように思えました。この「響き」を感じながら瞬間を切り取ってきた作品で地球の尊さを伝えられたらと思い、大自然の色の再現を目指すことにしました。言い換えれば、写真と印刷によるリアリティの追求です。

とはいえ、どこに本物のリアリティがあるかと言えば、撮影された写真が本当のリアルだとは限りません。写真は時間単位で光を切り取ったものであり、時間は常に流れています。実際にカメラに収まった凝縮された時間と自分が観た瞬間は、そこに時間がある以上、決して同じものにはなり得ない。つまり、本当のリアルなものをカメラに取り込むことはできないのです。

ですから今回追求するのは、正確には僕の「記憶色」ということになります。自分がこうだと思って撮った、その色の再現を目指すということです。それは自分の頭の中に焼きついた記憶であり、「この色はこうであるはずだ」という期待色のことでもあります。記憶した色は、時間を経て変わってしまうこともあります。それほど記憶色というものは曖昧なものです。『今この瞬間』は僕の中で鮮明なものとして存在しているのです。

それを、このグラフィックトライアルでどこまで再現できるか挑戦してみることにしました。印刷会社に所属するフォトグラファーとして撮った、美しいと素直に思える写真を、印刷技術で最高のアウトプットとして発表してみたいと思います。



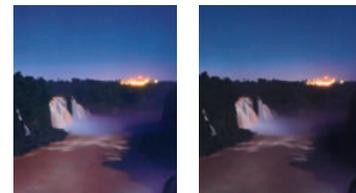
現場で感じたそのままの色をオフセットでつくりこむ

「その風景の音が聞こえてくるほど、印刷技術で写真を昇華させることを目指します。たとえば印刷では難しいとされるブルーやグリーンのおもしろさの再現、ダイナミックレンジの最大限の表現など。写真の良さを損なわずに、現場でシャッターを押した僕の気持ちまで伝わるような質感や色彩の表現にトライしたいと思います」

月夜の虹と水の表現

宵闇に浮かぶ虹の幻想的な色彩と、近景を流れる豊かな水、中・遠景に点在する滝。夜の情景と、鮮やかな色彩に透明な水という、相反する表現の融合が求められた。虹と右手前の水面を立体的に表現しつつ、夜のイメージを壊さないようにトーンを整えた。

①広演色のカレイドインキ(4色)で印刷



カレイドインキ4色 プロセスインキ4色
色域の広い広演色インキは、プロセスインキに比べて濁りのない鮮やかな色特徴だ。中でもカレイドは彩度の高さに優れていることで知られている。

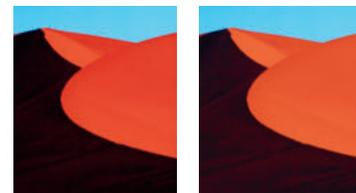
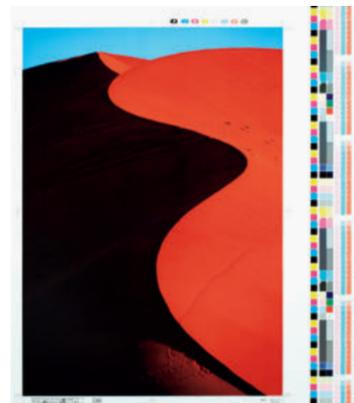
②特色4色を追加



特色青の分色 特色スミ(シメ版)の分色
薄藍、薄赤に加え、特色青で間の中にも繊細な調子を再現。シメ版でシャドウ部の濃度を引き締めている。

赤い砂と稜線のコントラスト

アプリコット色と呼ばれる赤みを帯びたパウダー状の砂が、朝の低い太陽によって強烈な光と影のコントラストを描きだしている。砂の赤と影の黒を極限まで濃度を高めて表現しながら、斜面に点在する動物の足跡や草などの繊細な表現が感じられるように最シャドウ部までつくり込んだ。



特色8色 カレイドインキ4色
高濃度の特色で強烈なコントラストをつくりだすとともに、ベースのプロセス4色の濃度も高めることで全体の調子を潰さないようにバランスをとっている。

ダイナミックレンジ

撮影で表現できる露光範囲の最大値と最小値の幅。写真用語でラティチュード。

氷河を照らす緑のオーロラ

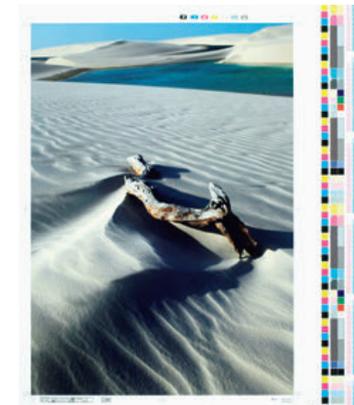
彩度の高い緑のオーロラと、限りなく黒に近い濃紺の空を中心に、近景にある氷河の反射光などの色彩表現が最大のポイント。コントラストを上げたY版で特色緑を印刷し、オーロラの鮮やかな色彩を生み出すとともに、夜空の深い色調にも微妙な調子をもたせている。



特色8色 カレイドインキ4色
彩度の高いオーロラの緑を特色緑で再現し、空や地表など暗部の深みは薄藍と薄赤で補い、黒のシメ版で引き締めた。空の星が潰れないように製版上で強調している。

白くきらめく水晶の砂漠

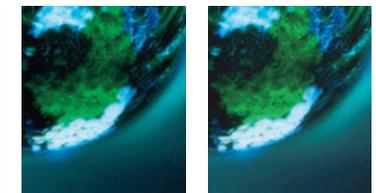
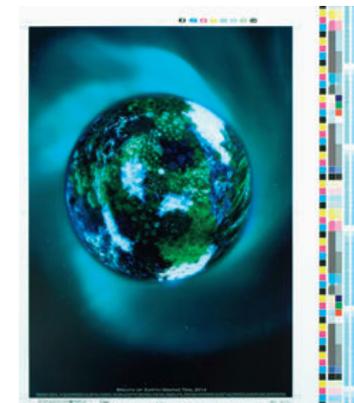
純白の砂漠、近景の流木、遠景に広がるエメラルドグリーンの湖。流木は硬めに、砂は柔らかく製版することで、それぞれの質感を担保しながら、温かく柔らかな空気感をもった遠大な距離感をイメージした。近景のシャドウ部などの微妙な調子にも留意している。



特色8色 カレイドインキ4色
砂漠のハイライトにパール含有率をギリギリまで高めたパールメジウムを施してキラキラ光る砂を表現。グレーのシメ版で豊かな調子を柔らかかに仕上げた。

花の地球とオーロラの宇宙

白と緑の強いコントラストが印象的なフラワーアレンジメントを、魚眼レンズによる撮影で地球に見立て、それを取り巻く大気と宇宙をオーロラで表した。地球の息吹を象徴する1枚として仕上げた作品。



特色8色 カレイドインキ4色
花を取り巻く空気の流れと、それを包みこむふわりとした空気の層を、微妙な調子を抽出した青と緑の特色版で表現し、最後にシメ版でぐっと引き締めている。

パールメジウム

パールのような柔らかい光沢感を表現できるメジウム。

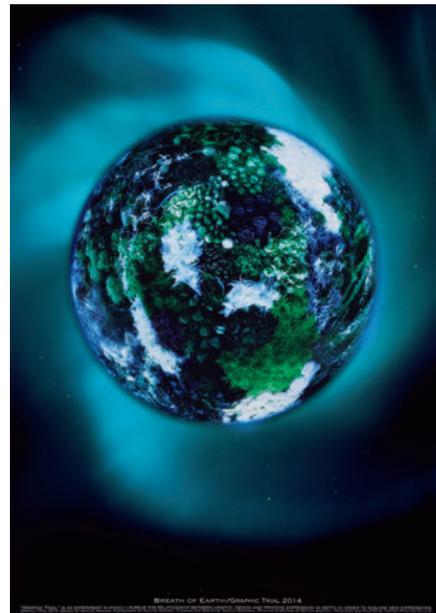
補色版

4色では再現できない絵柄に対して、特定の色調を強めたり、鮮やかに表現するために用いる、薄い色の特色版のこと。

FINISH

全作品とディテール

AKIHIKO NAGUMO GRAPHIC TRIAL 2014



GRAPHIC TRIAL 2014 AKIHIKO NAGUMO

Design and Photo : 南雲 暁彦

POINT & COMMENTARY

ポイントと解説



版構成



「CRYSTAL WIND」

用紙：サテン金藤N
四六判 160kg
版の構成：スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→
特色薄藍→特色薄赤→スミ→パールメ
ジウム→銀



版構成



「RED HORIZON」

用紙：サテン金藤N
四六判 160kg
版の構成：スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→
特色薄赤→特色薄藍→特色赤→スミ

EPISODE & POINT



ファインダーに収めた奇跡の場所

「ブラジル北部のアマゾン川の下流域の海沿いに広がるマラニャンセス国立公園のレンソイス大砂丘です。ほぼ100%石英という純白の砂漠には、雨期の時だけエメラルドグリーンの湖が無数に出現し、その絶景から“奇跡の場所”と呼ばれています。砂漠に対する概念が壊されるほど美しい場所です」(南雲)

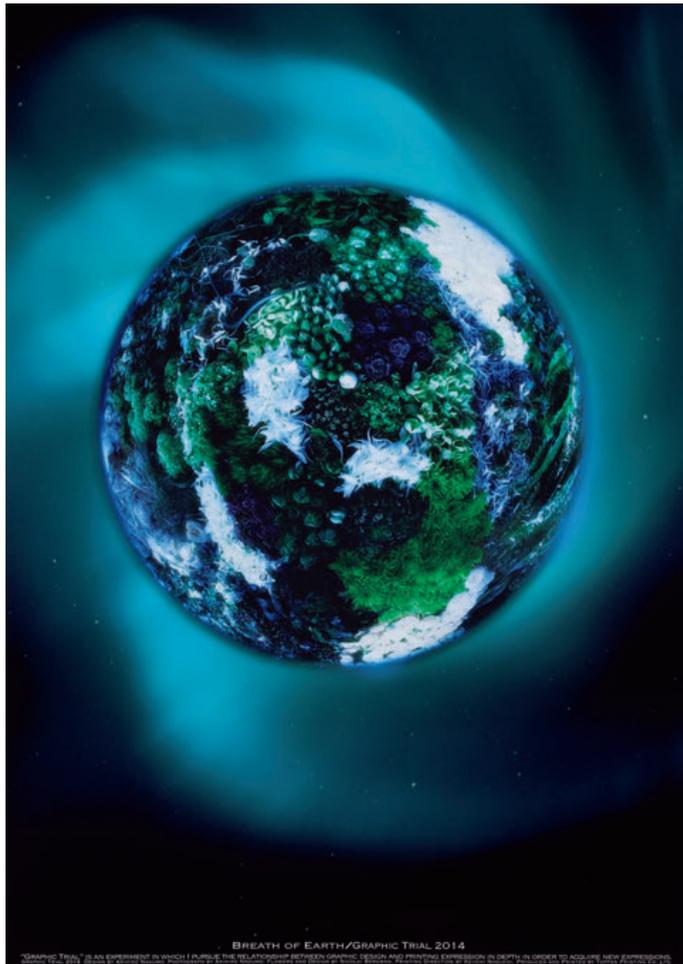
「パールを用いたのは、光沢感のある特殊紙で実験したことがきっかけでした。特殊紙を使うよりも、印刷適性の良い塗工紙に同じ効果を印刷でつくろうと思い、ライト部にパールメジウムを配したのですが、予想以上に面白い効果が得られました」(野口)

EPISODE



蘇った記憶色

「今回のトライアルでもっとも記憶色を蘇らせることのできた作品です。アフリカ・ナミビアのソサフレイで5年前に撮影しました。ナミブ砂漠の端に位置する標高300mの世界最大にして最古の砂丘です。手ですくうとサーと流れ落ちるほど細かな砂は、鉄分の錆でアプリコット色に染まっています。ここは僕にとっては最高の撮影地の一つでしたが、その印象があまりに強烈だったせいか、カメラに収まった画面では到底表現しきれないという思いが強く長いことお蔵入りにしていましたが、ようやく成就させることができました」(南雲)



版構成



「BREATH OF EARTH」

用紙：雷鳥スーパーアートN
 四六判 135kg
 版の構成：スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→
 特色薄藍→特色青→特色緑→スミ

EPISODE & POINT



メッセージを込めた1枚

「今回の象徴になるものとして作成しました。植物だけで地球を表現するアイコンをつくり、その周りに人工物のない自然の風景を配して、地球がはらむ色々な響きを伝えたいと思ったのです。この作品は花という自然の素材で世界観を表現しているニコライ・バーグマン氏とのコラボレーションでつくりあげています」（南雲）
 「特色の補色版を使うと、濃度や深みが増しますが、気を付けないとその濃度で、ベースの4色でつくった調子まで潰してしまう危険があります。この作品ではベースのC版を押さえることで微妙な調子を生かしました」（野口）



版構成



「NORTHERN LIGHT」

用紙：サテン金藤N
 四六判 160kg
 版の構成：スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→
 特色薄赤→特色薄藍→特色緑→スミ

EPISODE & POINT



時間を積層した写真

「アイスランド・バトナ氷河の氷河湖ヨークルサロンのオーロラです。オーロラのみを狙うのではなく、景色の中のオーロラを撮りたくて何度か訪れている場所なのですが、なかなかオーロラが出てくれずに毎回苦労しています。砂漠が時間を止めた写真だとすると、これは時間を積み重ねて撮影した写真ですね」（南雲）
 「風景は、人物や物のような近距離のものとは異なり、画面に広がる空気層をどう出すかが一つの勝負になります。インキの密度や濃度も距離感の表現では大きなポイントとなるため、仕上がりのサイズに配慮しながら製版しました」（野口）



EPISODE & POINT



瞬間を切り取った貴重な1枚

「ブラジルにある世界三大瀑布の1つに数えられているイグアスの滝です。世界に2か所しかないと言われる月光の虹（ルナレインボー）が出現する場所です。ただし、水量や風向き、天候など、この虹が出現する条件が揃うのはまれなことで撮影するのは至難の業でしたが、昨年ようやく成功した、僕の代表作の1枚です」（南雲）

「唯一、インクジェットの出力サンプルがあった作品ですが、あえてそれを手がかりにせずにデータを素直に再現することから始め、南雲氏の記憶色の再現を追い求めました」（野口）

版構成



「LUNA RAINBOW」

用紙：雷鳥スーパーアートN 四六判 135kg

版の構成：スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→特色薄赤→特色薄藍→特色青→スミ

AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

元来、写真原稿というものは複製の元になるもので、さらにそれを大量に複製するための技術が印刷です。印刷することでより多くの人に見てもらえるので、写真を印刷することは写真家にとって嬉しいことですし、写真と印刷には切っても切れない縁があると言えるでしょう。もちろん、インターネットができてからは印刷しなくても多くの人に見てもらえるようになりましたが、残念ながら画面で見る色調もトーンも端末によって変わってしまうので、見せたい状態で見せることは不可能です。ですからやはり作品として成就させるには、最高品質のアウトプットは非常に重要であり、写真に携わる者としては目指したい地点でもあります。

今回、僕の記憶の中に埋もれていた色彩が印刷によって蘇るという経験をすることができました。カメラがとらえきれずに心に埋まっていた色がPDの職人技によって再現され、「確かに自分はここにいた」というイメージが鮮烈なまでに浮かび上がってきたのです。これは本当に感慨深い体験でした。これまでは「所詮は大量複製のための手段だ」と割り切っていた印刷技術を見直すことができました。自然の色をカメラに撮り込み4色に変換し、インキの色にかえて紙に刷るという何段階ものプロセスを経れば、当然のことながらどんどん階調や色の再現領域は狭まっていきます。しかし、それを技術や経験によってイメージ通りの作品へと近づけることができます。そのためには印刷現場とのコミュニケーションがどんなに大事になってくるかも実感しました。僕の中で、今現在の印刷とカメラのスペックが両方とも浮き彫りになったように感じています。

写真のリアリティを追求するというコンセプトは、「こうしたい」に突き進む愚直なまでに実質的なものでした。技術一辺倒の実験的なトライアルではなく、この過程には写真と真正面から向き合った記憶が刻まれています。カメラマンが何を考え、印刷をどう捉えているか、その一端を知っていただけたら幸いです。

—— 南雲 暁彦

●プリンティングディレクターより

写真を印刷で再現するとき、昔はフィルムや印画紙が相手でしたが、今ではモニターに映し出された画像が相手です。ということはあの鮮やかで締まりもある色と勝負しなければならないということになります。

今回も原稿を提示された瞬間に、この濃度と色を再現するには多色刷りで行くしかない判断しました。標準より彩度の高い広演色のカレイドインキでつくった4色刷りをベースに、特色の薄藍と薄赤の版で濃度を補い、さらに各原稿の固有の色を特色で加え、最後にシメ版で暗部の濃度と全体の締まりをつくるという8版の設計です。この版設計を基本に手を加えてつくり込みました。

クリエイターの狙いを印刷の表現によって実現するのが我々PDの使命です。相手の言うことから意図を汲みとるわけです。もちろん我々は撮影された現場に居合わせていないので、実際のところはわからない。彼らの言葉から「こんな感じだろう」と推測していくしかない。後は技術的にそれを表現できるかどうかです。撮影した写真家や、描いた画家など、彼ら自身になったつもりで製版や印刷の現場に意図を伝えながらつくり込んでいきます。

正直なところ、この世界は経験と勘が頼りです。明快なセオリーがあるわけではないし、理屈では説明できない部分も多い。まあ、そこが何より面白い部分だなと思いつつ、今日も現場で格闘しているのですが…。

—— 野口 啓一

